朝鮮李朝における「營建都監」組織の変化について

ON THE CHANGES IN THE CONSTRUCTION WORK ORGANIZATION DURING THE YI-DYNASTY OF KOREA

中西 章*
NAKANISHI Akira

This paper is about the changes in construction work organization, "Do-Gam", during the Yi-Dynasty of Korea. The findings are as follows.

At the early stage of the dynasty, the organization of construction work took over that of Koryo-Dynasty. It underwent some changes during the 15th and 16th century. Toward the second half of the dynasty it was greatly enlarged, mainly composed of bureaucrats from the central government. But its scale was reduced after the middle of the 18th century.

key words : Korea, Yi-Dynasty, construction work

朝鮮、李朝、營建都監、營建組織

1. 序

朝鮮、李朝においては、大規模な建築工事に際して通常の工事組織とは別に「營建都監」（以下、「都監」とする）という臨時組織が作られ工事を遂行した。この「都監」による工事は李朝における官営の建築工事の中心であり、李朝の建築工事の状況を知る上で重要なものである。本稿は、この「都監」の構成および構成員について考察し、その李朝を通じての変化をあきらかにしようとするものである。

李朝における建築活動については、杉山信三博士による高麗末から李朝初期の各王による造営活動とその監董者についての研究がある¹⁾。また、李朝における建築工事の組織については、李朝前期ではソウル南大門（1448）、後期では華城（水原城：1796）の工事記録を通じて、申榮勲氏と金東旭博士がそれぞれに概要を示している²⁾。そして、金東旭博士は李朝における官営工事の記録である「營建都監儀軌」の記事を通じて李朝の官庁における建築工匠組織の変遷を論じている³⁾。さらに、朴彦坤・李王基博士は李朝の營建職制の研究のなかで、李朝前期を中心に監董者について触れており⁴⁾、洪錫珠・朴彦坤博士は光海君代の宮闕造営について、「都監」の組織や構成員について考察している⁵⁾。しかし、李朝を通じての「都

監」の工事組織の構成および構成員についての詳しい検討は残された問題であると思われる。

2. 李朝前期の「都監」

李朝の「都監」について『増補文獻備考』には

本朝有事則設都監有都監都提調提調都廳郎廳監造官隨事増減其規一

とあり⁶⁾、構成員として都提調、提調、都庁、郎庁、監造官があるとされる。しかし、『増補文獻備考』は、英祖46年（1770）に最初に編纂された『東国文獻備考』がもとになっており⁷⁾、これがそのまま李朝の全時代を通じた「都監」の組織といえるものではない。

李朝前期の「都監」のうち、『李朝実録』の記事をもとに、組織がある程度わかるおもなものを示したものが表1である。この表をみると、太祖が李朝を開いた直後の14世紀末には、「都監」は判事を筆頭として組織されている。判事以下の組織は、太祖4年（1395）の都城造築都監にみられるように、副判事・使・副使・判官・録事で構成されていたとみられる。この工事では、城壁 600尺を「字」として、一字をさらに六つの「号」に分けている。そして、その二字ごとに判事・副判事を各1人置き、さらに使・副使・判官12人を置いている⁸⁾。

* 東京工業大学工学部附属工業高等学校 教諭・工博

Teacher, Technical High School Attached to Tokyo Institute of Technology, Dr. Eng.

このような李朝最初期の「都監」の構成は、上記の『増補文献備考』に記されている構成とは異なっており、このような構成は、高麗の都監の制度を受け継いでいるものとみられる。高麗の建築関係の都監の構成についてはあきらかではないが、『高麗史』にはさまざまな都監について構成が記録されており、「使、副使、判官」などが主な構成員とされている⁹⁾。また、禰王14年(1388)に公主が亡くなった際に「設殯殿国葬造墓斎四都監各置判事使副使判官録事」とあり、この都監が判事・使・副使・判官・録事で構成されていることがわかる¹⁰⁾。

このような組織は、15世紀に入ると、判事・副判事に代わって都提調・提調がみられるようになる¹¹⁾。判事、副判事と都提調、提調の具体的な職責の違いは不明であるが、徐々に『増補文献備考』の「都監」に近い構成に変わっているといえる。しかし、太宗16年(1416)の都城修築都監や世宗3年(1421)の都城修築都監でみられるように、都提調・提調以下の組織は、李朝初期の太祖の時代と同じく、使・副使・判官・録事で構成されている。世宗3年の工事では、右議政鄭樞を都提調として、提調を33名、使・副使・判官・録事290名を置いている¹²⁾。

さらに、15世紀後半から16世紀の都監では、成宗18年(1487)の春宮都監や、燕山君10年(1504)の文廟都監では、提調の下に郎庁が置かれている。郎庁は『増補文献備考』に記された「都監」でみられるものであり、「都監」の構成が李朝の構成に近いものとなってきたことがわかる。また、「都監」とは明記されていないが、端宗即位年(1452)の昌徳宮の重修工事に関連して、都庁という呼称がみえる。この都庁が『増補文献備考』の「都監」の都庁と直接結びつくかどうかはわからないが、この時、都庁に任じられた者は工匠などの使役に大きな権限を持ち、実質的に工事の中心であった¹³⁾。

このほか、燕山君10年(1504)の文廟都監や明宗9年(1554)の造成都監では堂上という呼称がみられる。堂上官は正三品以上の品階を

表1 李朝前期の「都監」

年 代	都 監 名	組 織
太 祖 2 (1393)	京城修築	判事
太 祖 3 (1394)	新都宮闕造成	判事
太 祖 4 (1395)	都城造築	判事・副判事・使・副使・判官・録事
太 宗 4 (1404)	漢京離宮造成	提調
太 宗 11 (1411)	開渠	提調
太 宗 13 (1413)	京城修補	都提調・提調
太 宗 15 (1415)	行廊	提調
太 宗 16 (1416)	都城修築	提調・使・副使・判官
世 宗 3 (1421)	都城修築	都提調・提調・使・副使・判官・録事
世 祖 7 (1461)	修理 (景福宮)	都提調・提調
成 宗 15 (1484)	修理 (昌慶宮)	都提調・提調・瓦署提調・郎庁・瓦署別提・録事／堂上・郎庁
成 宗 18 (1487)	春宮	提調・郎庁・画員・医員
燕山君 10 (1504)	文廟	提調・郎庁／堂上
燕山君 11 (1505)	修理	提調
燕山君代 (1494~1506)	修理・築城	都提調・副提調・郎官・監役官
明 宗 8 (1553)	造成 (東宮)	都提調・提調
明 宗 8 (1553)	大内繕修	提調
明 宗 9 (1554)	繕修 (景福宮・東宮)	堂上・郎庁

持つ者の一般的な呼称で¹⁴⁾、この堂上は特に都監における組織の名称ではなく、「都監」の構成員のうち正三品以上の者を指している語と考えられる。

3. ソウル南大門の工事組織

李朝前期の建築工事組織をより詳しく考察するための資料にソウル南大門で修理工事の際に発見された墨書(上梁文)がある¹⁵⁾。これらの工事について「都監」を立てたとは明記されていないが、都城の正門である南大門の創建・再建・修理工事であり、当然「都監」あるいはそれに類する工事組織が作られたとみられる。そこで、この墨書をもとに表2に各工事組織の構成と人数を記し、この表に基づいてそれぞれの工事の構成についてみて行く。

(1) 洪武29年(1396)の工事と工事組織

この工事は、李朝太祖による漢城(現ソウル)遷都にともなう都城の創建工事の一環として行われたものである。墨書は、洪武29年(1396)10月のもので、2件発見されている。一つは上層の母屋桁に添えた材(長舌)、今一つは棟木の上面から発見されている。

工事組織は、判事を筆頭¹⁶⁾に、副判事2名、使3名、副使2名、そして11名の判官と別監役、掌務録事で構成されている。このような判事を筆頭とした構成は、前述の李朝最初期の「都監」の組織と同様であり、南大門の工事も遷都に伴う都城の造営の一環であり、このような構成を踏襲しているとみられる。

判事以下の構成員の品階を後述する李朝後期の「都監」の組織と比較してみると、判事・副判事が二品程度の品階を持っており李朝後期の「都監」の提調、使と副使が三・四品程度で都庁、判官は五品程度で郎庁に相当する。しかし、後述するように、李朝後期の「都監」は都提調となる議政府の議政クラスの者を筆頭に六曹の現職の官吏を中心に政府組織をそのまま移したような構成であったが、ここでは前職の者がほとんどであり、使・副使に六曹の現職の官吏はまったく含まれていない点に違いがある。

(2) 正統13年(1448)の工事と工事組織

『世宗実録』に「新作崇礼門…」とある¹⁷⁾工事で、南大門の再建ないしは大規模な改築工事と考えられる。墨書は正統13年(1448)3月のもので、上下2段ある棟木のうちの上の棟木の下面から発見された。

この墨書にみられる工事組織は、提調として「正憲大夫議政府左参賛判戸曹事鄭萃」と「資憲大夫刑曹判書閔伸」の2名が記されている。続いて監役官として6名が記され、さらに欠字が多いが別監役として12~3名がみられる。

表2 ソウル南大門の建築工事組織

洪武29年(1396)	正統13年(1448)	成化15年(1479)
判 事 1 (3)	提 調 2	提 調 8
副判事 2		
使 3	監 役 官 6	郎 庁 5
副 使 2		
判 官 1 1		
掌務録事 2	別 監 役 1 2 ~ 3	翎口部将 2
別 監 役 1		月令医員 1
		衙 前 4

提調の品階が正二品であるため、都提調はみられないが、提調を筆頭におく構成は、前述の15世紀後半以降の「都監」の構成と同じである。しかし、李朝後期の「都監」のような都庁・郎庁はみられず、品階の上からみると監役官に正三品から従七品まで広い範囲の者があてられ、都庁・郎庁・監役官（監造官）が未分化の形を示しているとみることができる。すなわち、この正統13年の工事の組織は、完全には『増補文献備考』の「都監」のような組織になっているとはいえず、李朝最初期の「都監」のような高麗以来の構成から変化する過渡的な構成といえる。なお、提調には賦役に関わる戸曹、監役官には建築工事を掌る繕工監の者が含まれている点は、李朝後期の「都監」と共通している。

(3) 成化15年(1479)の工事と工事組織

南大門の「傾頽」が著しいための改築工事である¹⁸⁾。墨書は成化15年(1479)4月のもので、上層北側の母屋桁の下面から発見されている。

この工事では、提調として「正憲大夫知中枢事韓繼純」をはじめ8名が記され、続いて郎庁が5名、そして鉤口部将2名、月令医員1名、衙前4名がおり、大木などの工匠に続いて領役使令が記されている。

提調は二品から三品、このなかには賦役に関わる戸曹、土木・建築工事を管掌する工曹の者が含まれている。後に述べるように、李朝後期の「都監」でも提調に戸曹、工曹の判書などが含まれており、李朝後期の「都監」に近い構成といえる。また、郎庁も繕工監の者2名と、工曹、戸曹、兵曹の正郎各1名で構成されている点も李朝後期の「都監」に近い構成である。

このほか鉤口部将は「領役部将」とみられ、医員・使令などとともに李朝後期にもみられるものである。なお衙前は六曹の書吏が配されており、李朝後期にみられる「員役」のように事務的な仕事をする者と考えられる。

4. 李朝後期、18世紀半ば以前の「都監」の構成と構成員

李朝後期の「都監」については「都監」による工事記録である「宮建都監儀軌」（以下、「儀軌」とする）が残されており、より詳しい構成がわかる。以下、表3にあげた李朝の「儀軌」20点を資料として、李朝後期の「都監」の構成について考察する。

李朝後期の「儀軌」に記録された「都監」のうち、18世紀半ばまでの7つの「儀軌」に記録された9つの「都監」（「萬寿殿修理」、

「永寧殿修改」では途中で一旦工事を中止しており、その前後で2つの「都監」が記録されている。）では、前述の『増補文献備考』に示されているような「都監」の構成がみられる。これらの「都監」の構成は表4に示したが、李朝後期の「都監」のうち、まずこれらの「都監」における都提調以下の構成員について検討する。

(1) 都提調・提調および堂上

都提調・提調は7つの「都監」でみられ、都提調は1人、提調は3～5人である。都提調・提調がみられない「昌慶宮修理」と「南別殿重建」ではそれぞれ7人、3人の堂上がいる。

都提調は交代を含めて延8人であるが、議政府領議政4、同左議政1、同右議政2、領中枢府事1である。品階はすべて正一品であり、「都監」中のもっとも高位の者で工事の総責任者とみられる。前記『増補文献備考』の冊禮都監には

〔補〕冊禮都監都提調一員 議政…

とあり¹⁹⁾、都提調は議政府の議政クラスの正一品の者が基本であったと考えられる。

表3 資料とした「宮建都監儀軌」

儀 軌 名	年 代	所 蔵
昌慶宮修理都監儀軌	仁祖11(1633)	奎章閣
昌德宮修理都監儀軌	仁祖25(1647)	蔵書閣
昌德宮萬寿殿修理都監儀軌	孝宗8(1657)	蔵書閣
永寧殿修改都監儀軌	顯宗8(1667)	蔵書閣
南別殿重建廳儀軌	肅宗3(1677)	奎章閣
宗廟改修都監儀軌	雍正3(1725)	奎章閣
真殿重修都監儀軌	乾隆13(1748)	蔵書閣
懿昭廟宮建廳儀軌	乾隆17(1752)	奎章閣
垂恩廟宮建廳儀軌	乾隆27(1764)	奎章閣
景慕宮改建都監儀軌	乾隆41(1776)	奎章閣
文禧廟宮建廳膳録	乾隆54(1789)	奎章閣
華城城役儀軌	純祖元(1801)*1	
仁政殿宮建都監儀軌	嘉慶10(1805)	奎章閣
顯忠宮別廟宮建都監儀軌	道光4(1824)	蔵書閣
西闕宮建都監儀軌	道光12(1832)	蔵書閣
昌慶宮宮建都監儀軌	純祖34(1834)*2	奎章閣
昌德宮宮建都監儀軌	純祖34(1834)*2	奎章閣
宗廟永寧殿増修都監儀軌	道光16(1836)	奎章閣
仁政殿重修儀軌	咸豐7(1857)	蔵書閣
南殿増建都監儀軌	咸豐8(1858)	奎章閣

年代は「儀軌」によるが、

*1は『華城所役儀軌』解題による。

*2は『奎章閣圖書韓國本総目録』による。

表4 17・18世紀半ばまでの都監の構成

昌慶宮	昌德宮	萬寿殿Ⅰ	萬寿殿Ⅱ	永寧殿Ⅰ	永寧殿Ⅱ	南別殿	宗廟	真殿
堂上7 都庁2 郎庁6 監役官6	都提調1 提調5 都庁2 郎庁6 監造官14	都提調1 提調4 都庁2 郎庁5 監造官8	都提調1 提調4 都庁3 郎庁5 監造官13 工匠車馬夫次知1	都提調1 提調3 都庁2 郎庁3	都提調1 提調5 都庁4 郎庁3 監造官4	堂上3 郎庁4	都提調1 提調3 都庁2 郎庁3 監造官5	都提調1 提調3 都庁2 郎庁3 監造官4
員役	領役部将32 員役		領役部将60 員役		員役	員役	員役	員役 (領役部将) (看役人)

()内は「座目」に記されていない者

提調は、1人を除いてすべて正二品以上であり、都提調につづく高位である。また、延31人の提調のうち27人が六曹の長である判書であり、提調には六曹の判書クラスが配されることが基本であったと考えられる。

堂上は、交代して加入した1人を除いて他は正二品以上の者である。前述のように「堂上」は正三品以上のものをさす一般的な呼称と考えられるが、ここでみられる堂上は品階および人数から提調と同様の者であるとみられる。

提調・堂上の所属は表5に示すようになり、各「都監」には戸曹の判書、参判があり、「真殿重修」と交代後の「宗廟改修」を除いては工曹の判書が含まれている。交代する場合にも、表のように所属が同じ者に交代する場合が多く、これは建築工事を掌る工曹と賦役に関係する戸曹との協力が建築工事という性格上、特に必要であったためと考えられる。また、「昌慶宮修理」や「昌徳宮修理」などの宮殿に関する工事では兵曹、「永寧殿修改」「南別殿重建」「宗廟改修」の工事には礼曹の判書、参判が必ず提調となっているが、これも宮殿の管理に関係する兵曹、祭享を掌る礼曹との協力が建物の性格上、必要であったためと考えられる。

表5 提調・堂上の所属（矢印は交代による変化）

	昌慶宮	昌徳宮	萬壽殿Ⅰ	萬壽殿Ⅱ	永寧殿Ⅰ	永寧殿Ⅱ	南別殿	宗廟	真殿
工曹	1	1	1	1	1	1	1	1→0→0	0
戸曹	1→1	1	1	1	1	1	1	1	1
兵曹	1	2→2	1	1	0	1	0	0	0→1
礼曹	0	0	0	0	1	1	1→1→1	1	1→0
他	4	1	1	1	0	1	0	0→1→1	1

(2) 都庁・郎庁・監造官

都庁は「南別殿重建」以外の8つの「都監」でみられ、人数は再開後の「萬壽殿修理」で途中から増員して3人、同じく再開後の「永寧殿修改」で途中から4人となるほかは2人であり、2人が基本であったと考えられる。また、都庁の品階は正三品～従六品であるが、なかでも三・四品の者が多い。

郎庁は各「都監」に3～6人ずつおり、品階は五・六品が多い。また、交代者を除いた延37人の郎庁のうち32人が六曹の官吏である正郎・佐郎である。そして、表6のように、提調・堂上の場合と同じように工曹・戸曹の正郎や佐郎を含み、さらに宮殿の工事では兵曹、祖廟関係の工事では礼曹の正郎や佐郎を含むという傾向がみられる。

都庁・郎庁に関しては各「儀軌」に記載の事目（公事をすすめるに際して定めた規則）に

一郎廳八員内弘文館應教南老星禮賓寺正李一相都廳稱號其餘六員分掌五所董役爲白齊

というような項があり²⁰⁾、郎庁のなかから（おそらくは品階の高い）2名が都庁を称する者と定められたことがわかる。

上記の事目の「所」は「都監」の工事を建物ごとに、または工事内容によって分けたものである²¹⁾。郎庁はこの各々の「所」に1～2人ずつ配され工事を管理したことがわかる。なお「爐冶所」や「別工作」には郎庁がいないことが多い。

郎庁は監造官とともに木手を伴って材木の選定に行ったり工事に必要な物資を担当するという記事が「儀軌」にみられ²²⁾、工事への直接的な関与がみられる。

監造官は、停罷前の「永寧殿修改」と「南別殿重建」を除いた7つの「都監」で各「所」に1～4人ずつ配されている。品階は正六品～従九品であり、工曹のうち土木・建築を管掌する繕工監の者が必ず含まれている。特に各「儀軌」の事目には「別工作」の監造官を繕工監から選ぶと定められ²³⁾、「別工作」「爐冶所」の監造官は必ず繕工監の者である。また、監造官がいない「南別殿重建」でも「別工作」の郎庁には、郎庁としては品階が低い繕工監の官吏である監役官（従九品）が配されている。

監造官も郎庁とともに木手を連れて材木を選びに行ったり²⁴⁾、宿直をする²⁵⁾という記事が「儀軌」のなかにみえ、郎庁とともに直接的に工事に関与していたものと考えられる。

表6 郎廳の所属（矢印は交代による変化）

	昌慶宮	昌徳宮	萬壽殿Ⅰ	萬壽殿Ⅱ	永寧殿Ⅰ	永寧殿Ⅱ	南別殿	宗廟	真殿
工曹	2	2→1	2	3→2	1	1→1	2	1	1
戸曹	1	1	2	1	1	1→0	1→1	1→1	1→1
兵曹	1→1	1	1	1→1→0	0	0	0	0→1	0
礼曹	0	1→0	0	0	1	1→0	1→1	1→0	1→0
他	1→1	1→3	0	0→1→2	0	0→2	0	0	0

(3) その他

以上のほか「都監」には「員役」として書吏・算員等がいる。これらは字義より記録や経理等の事務的な仕事に従事する者と考えられる。また「萬壽殿修理」では監造官につづいて「諸色工匠及車馬夫次知」として、漢城府参軍（正七品）の官職をもつ者が記されている。「萬壽殿」では漢城府が工匠の供給をまかされている点から、工匠・車馬夫の供給・管理の任にあたったものと推定できる。

5. 李朝後期、18世紀半ば以降の都監の構成

18世紀半ば以降の14の「都監」（「垂恩廟」では、「營建」と「移建」の二つの「都監」が記録されている）の構成を示したのが表7である。この表をみると、18世紀半ば以前のように都提調、提調、都庁、郎庁、監造官という構成となる例がほとんどみられなくなり、主な構成員が2～5名程度の小規模なものが一般的となる。

(1) 18世紀半ば以降の一般的な構成

「文禧廟營建」「華城城役」「顯忠宮營建」「永寧殿増修」「南殿増建」以外の9つの「都監」がこのような小規模な構成になっている。堂上、提調または監董堂上と称される1名がもっとも品階の高い者で、工事を統括すると考えられる。「景慕宮改建」以外はいずれも戸曹判書であり、「景慕宮改建」では戸曹参判が堂上となっている。この下には郎庁がおかれ、「仁政殿營建」では2名、その他では1名である。いずれも、戸曹の正郎・佐郎である。また、「懿昭廟營建」「垂恩廟營建」「景慕宮改建」「仁政殿營建」では繕工監の者が監役官として配されているが、その他の工事では監役官はみられない。

これらの工事では「垂恩廟宮建」「景慕宮改建」を除いて、18世紀半ば以前にはみられなかった看役や牌将という者が、何名かずつ配されている。看役や牌将の、はっきりとした役割は不明であるが、「看役」とは役事の世話をする者、「牌将」とは工匠を率いる者とされており²⁶⁾、工事に直接的に関わっている者とみられる。特に、牌将は金東旭博士の指摘にもあるように、他の工事で木手として名前がみられる者がおり²⁷⁾、工匠により近い存在であったとみられる。これらの者は「前…」とあったり、「出身」「閑良」とある者が多い。すなわち、看役や牌将の多くは、現役の官僚ではなく、官職を退いた者や官職に就いていない者であり、18世紀半ば以前の官僚を中心とした組織に代わって、彼らが工事の直接的な監督を行っていたと考えられる。

このように、議政府の議政クラスを頂点として多くの高い品階を持つ者によって構成された18世紀半ば以前の工事に比べ、18世紀半ば以降の「都監」では高い品階の者が減り、もっとも少ない例では、提調と郎庁の二人だけとなっている。また、この二人は、いずれも賦役に関係するとみられる戸曹に属し、工事に関わる仕事のうち賦役の管理が彼らの仕事の中心であったことをうかがわせる。

(2) 規模が大きな「都監」の構成

「都監」の構成員が多い、比較規模が大きな「都監」には、「文禧廟宮建」「顕思宮宮建」「永寧殿増修」と「華城城役」がある。

このうち、「華城城役」は、水原城築城という李朝後期の大事業であり、多くの構成員が配されている。筆頭は総理大臣で正二品の領中樞府事、続いて監董堂上、都庁、策応都庁が各1名ずつ配されている。監董堂上は「水原府留守」、策応都庁は「水原府判官」でいずれも水原府の関係者であり、賦役に関係していたとみられる。この下に多くの別監董・監董・別看役・看役・京監官・府監官・京牌将・府牌将がいるが、いずれもほとんどが前職あるいは閑良や嘉善、折衝という官位のない者たちである。

この工事では、表7にみるように、工事の規模は大きい、実質的な「都監」の組織としては総理大臣、監董堂上、都庁、策応都庁の4名とみられ、前述の18世紀半ば以降の一般的な「都監」の構成と似た構成といえる。

表7 18世紀半ば以降の「都監」の構成

懿昭廟	垂恩廟宮建	垂恩廟移建	景慕宮	文禧廟	華城城役	仁政殿	顕思宮	昌慶宮	昌徳宮	西関	永寧殿	仁政殿	南殿
堂上1	堂上1	堂上1	堂上1	監董大臣1 堂上3 都庁1	総理大臣1 監董堂上1 都庁1	提調1	監董大臣1 提調3	提調1	提調1	提調1	都提調1 提調3 都庁2	監董堂上	都提調1 提調3 都庁2
郎庁1 監役官1	郎庁1 監役官1	郎庁1 監役官1	郎庁1 監役官1	郎庁2 監造官1 築塙都庁	策応都庁1	郎庁2 別工作2	郎庁3 監造官1	郎庁2	郎庁1	郎庁1	郎庁3 監造官3 別工作1	郎庁1	郎庁3 監造官3 別工作1
員役 領役部将	員役 領役部将 捕盜軍官 捕盜軍士	員役 別看役 領役部将 相地官 捕盜軍士	員役 (看役) (別看役) (龜室 看役) (領役 部将)	別看役 看役牌将 雜物看役 侍令 員役 (運石牌将)	別監董10 監董12 別看役2 (看役) 看役4 京監官7 府監官6 京牌将60 府牌将122	別看役 領役牌将 (看役) (領役 捕校) (守直 捕校)	別監役 看役牌将 (浮石牌将) (木手牌将) (外塙看役 牌将)	別看役 宮建 都牌将 各所 牌将 員役	別看役 看役牌将 都牌将 牌将 各所牌将 員役	別看役 各所牌将 員役	員役 (別看役) (看役 都牌将) (牌将) (捕校兼 牌将) (冶所 牌将)	別看役 監董牌将 看役牌将 画師牌将 爐冶牌将 捕校 員役	員役 (別看役) (看役 牌将)

() 内は、「座目」に記されていない者

次に、「文禧廟宮建」と「顕思宮宮建」では、全体を統括するとみられる監董大臣は、「文禧廟宮建」では正一品の議政府左議政であり、「顕思宮宮建」では正二品の行判中樞府事が任命されている。その下に六曹の判書クラスの者3名が、「文禧廟宮建」では堂上、「顕思宮宮建」では提調として配されている。この下には、さらに郎庁があり、「文禧廟宮建」ではそのうち1名が都庁とされている。郎庁および都庁はいずれも礼曹・戸曹・工曹の正郎である。

このような構成は上記の18世紀半ば以前の「都監」と似ているが、一方で、これらの工事では、18世紀半ばまでにみられた工事区分の「所」がなく、郎庁も「所」に配されることはなく、監造官も繕工監の者が1名いるだけである。また、「文禧廟宮建」では5名の看役牌将、「顕思宮宮建」でも看役牌将、運石牌将、浮石牌将、外塙看役牌将など、牌将が置かれている。このような牌将は、上記のこの時期の一般的な「都監」でみられるもので、この2つの工事では郎庁と監造官が「所」に配されず工事との直接的な関係が薄れ、代わって牌将が置かれている点で、この時期の一般的な「都監」と共通する点も多い。

これに対し、「永寧殿増修」と「南殿増建」には18世紀半ば以前と同じく都提調、提調、都庁、郎庁、監造官で構成され、19世紀の「都監」としては特異な構成となっている。都提調は、「永寧殿増修」では18世紀半ば以前の「都監」とは少し異なり、正二品の「行判中樞府事」であるが、「南殿増建」では正一品の「議政府領議政」である。提調にはそれぞれ礼曹、戸曹、工曹の判書があてられ、都庁は二名である。また、郎庁もそれぞれ戸曹、礼曹、工曹の正郎の三名でそれぞれ「所」に配されており、監造官も各「所」に配される。一方、この工事でも何名かの「牌将」がみられ、この点ではこの時期の他の「都監」と同様である。

「文禧廟宮建」「顕思宮宮建」「永寧殿増修」「南殿増建」の4つの「都監」で、このように18世紀半ば以前と似た比較規模が大きい「都監」が構成された理由については明確ではない。しかし、これらの「都監」では、定礎や立柱・上梁などの建築工事に係わる儀式的ほかにさまざまな祭享の儀式が行われている²⁸⁾。したがって、賦役を管理する戸曹だけでなく、祭享の儀式を掌る礼曹との協力も「都監」に必要であり、このような構成となったのではないかと考えられる。

6. 結

『李朝実録』やソウル南大門の墨書（上梁文）から李朝前期の建築工事の組織をみると、李朝最初期の「都監」では、判事、副判事、使、副使、判官、録事という構成となっている。このような「都監」の構成は、高麗の都監の構成を受け継いだものとみられる。

その後、15世紀にはいと徐々に李朝後期の「都監」でみられる提調や監役官が置かれるようになり、さらに郎庁がみられるようになる。提調や郎庁は、それぞれ賦役を担当する戸曹や工事を管轄する工曹の者、さらに郎庁には建築工事を担当する繕工監の官吏も含まれており、李朝後期の「都監」により近い構成へと変化する。

李朝の社会体制は、当初、高麗の体制を受け継いだ、『経国大典』が成宗2年(1470)に施行されたことによって、李朝の体制が確立されたとされる²⁹⁾。「都監」の組織もまさにこれに対応した変化をしている。すなわち、高麗の制度を受け継いだ李朝最初期から15・16世紀を通じて、李朝の構成へと変化している。

李朝後期になると、「都監」の構成は『増補文献備考』にみられるような都提調を筆頭とした構成がみられるようになる。18世紀半ば以前には、都提調は1名で正一品、主として議政府の議政である。この下に提調が数人おり、正二品以上で六曹の判書であることが多い。提調には工曹・戸曹、建物の性格によって兵曹・礼曹の判書や佐郎が含まれる。提調の下都郎は、三・四品程度の者2名で郎庁のなかから指名される。郎庁は各「所」に1・2名配され、五・六品程度、六曹の正郎・佐郎が多く、提調の場合と似た傾向がみられる。監造官も各「所」に配され人数は1～4人ずつであり、品階は六～九品である。工曹のうち土木・建築を管掌する繕工監の官吏が多い。

18世紀半ば以降になると、中央の官僚が「都監」の組織に加わる割合が減っている。18世紀半ば以降の一般的な建築工事では、賦役に関わる戸曹の判書と正郎が「都監」の組織に加わるだけで、18世紀半ば以前のような大規模な工事組織は作られなくなる。代わりに、官職のない者たちが看役や牌将として工事組織に組み込まれている。

注

- 1) 杉山信三「麗末鮮初に見る造営の監董者について」（『朝鮮建築史研究報告』第三冊、昭和25年、私家版）および「麗末鮮初代の造営活動とその監董者について」（朝鮮学報 2、昭和26年10月）
- 2) 申榮勳『韓屋과 그 歴史』（1975年、에밀레美術館）および『韓国古建築断章 上』（1975年、東山文化社）
- 3) 金東旭「朝鮮時代 造営組織研究 I～III」（大韓建築学会誌 巻27～112、113、115号、1983年6、8、12月）
- 4) 金東旭「大木より見た李朝時代の建築工匠」（日本建築学会論文報告集 327、昭和58年5月）および『韓国建築工匠史研究』（1993年、技文堂）
- 5) 朴彦坤・李王基「朝鮮王朝의 營造 職制에 관한 研究」（大韓建築学会誌 巻24～97、1980年12月）
- 6) 洪錫珠・朴彦坤「光海君 代の 宮闕 宮建에 관한 연구」（建築歴史研究 第8巻4号、1999年12月）
- 7) 増補文献備考 巻二百二十七 職官考十四 都監
なお、ここには、冊礼都監以下の各種都監についても記されているが、この中に宮建都監の項はない。
- 8) 英祖46年(1770)に王命によって『東国文献備考』が編纂され、その後正祖6年(1782)に改訂され『増補東国文献備考』が編纂された。これをもとに高宗代になってさらに改訂され1908年に刊行されたのが『増補文献備考』である。
- 9) 太祖実録 巻九 五年丙子正月戊辰条
- 10) 高麗史 志 巻三十一 百官二 諸司都監各色条
- 11) 高麗史 列伝 巻二 后妃二 魯国大長公主条
- 12) 建築工事に関連して、監督者が「提調」と呼ばれる例は、すでに太祖4年(1395)の大廟の工事で「董役提調官」と呼ばれる例がみられる。
- 13) 世宗実録 巻十四 三年十二月己亥条

- 14) 端宗実録 巻四 即位年十二月己亥条
- 15) 李弘禧 編『新国史辞典』（1978年、大栄文化社）
- 16) 서울南大門修理報告書作成委員会 編『서울南大門修理報告書』（서울特別市教育委員会、1966年）
- 17) 二つの墨書の内容はほぼ同じだが、棟木のもものでは第1段に判事として「嘉靖大夫中樞院使崔有慶」とあるのに続いて「正憲大夫全羅道都觀察諱李茂」と「推忠翊戴開国功臣資憲大夫完山府尹孫興宗」とあるが、上層長舌のものでは後の二人は墨書の最後に記されている。
- 18) 世宗実録 巻百十七 二十九年八月己丑条
- 19) 成宗実録 巻九十 九年三月壬午条
- 20) 増補文献備考 巻二百二十七 職官考十四 都監
- 21) 昌徳宮修理都監儀軌 丁亥六月十五日 都監事目
- 22) 拙稿「朝鮮、李朝における建築工事区分と建築工匠について」（日本建築学会計画系論文集 491、1997年1月）参照。
- 23) 昌徳宮萬壽殿修理都監儀軌 丙申八月初九日
…昨日郎廳監造官分往江上擇執材木之際欲帶木手而僅得二名…
昌慶宮修理都監儀軌 四月初一日事目單子
一郎廳五員分三房察任為白乎矣米布雜物則戸曹郎廳次知軍匠則兵曹漢城府郎廳材木鉄炭等則工曹繕工監郎廳分掌為白齊
- 24) たとえば昌徳宮修理都監儀軌 丁亥六月十五日都監事目に、一別工作監造官乙良令繕工監擇定為白齊
- 25) 注22
- 26) 永寧殿修改都監儀軌 一所、手本秩 丁未三月初三日
一本所今月初一日始役乙仍子監造官一員直宿之意
啓下為有等以今日為始每日燈油七夕式望矩一柄式上下進排事擇甘為只為堂上手決内依
- 27) 李熙昇 編『国語大辞典』（1961年、民衆書林）
- 28) 金東旭 前掲書 214ページ
- 29) 顯思宮を除いた3つの「儀軌」には工事の日取りを定めた「折日」の項があり、そこに、建築工事に関する「定礎」や「上梁」のほか次のような儀式の日取りが記されている。
・文 禮 廟：習儀、入廟
・永寧殿増修：宗廟移安、永寧殿移安、宗廟還安、永寧殿還安など
・南 殿：各室移安、純祖大王御真權安齊殿、各室還安など
- 29) 韓沽欣（平木貫 訳）『韓国通史』（昭和51年、学生社）

(2001年1月5日原稿受理、2001年3月15日採用決定)